

〔論説〕

# 危機のなかの古典（続）

——ターニングブル『食うものをくれ』——

與那覇 潤

一

×××は、無用の付属物を棄て去ることに成功した。無用の、と私が言うのは、家族とか、社会的協同性とか、信仰とか、愛とか、希望とか、そうしたものである。つまり、×××にとってはそれらすべてが生存を妨げるものであったという、強力な理由によって。<sup>(1)</sup>（二七五頁）

伏字にした箇所「コロナ」と入れても意味が通ること、二〇二二年のいま新鮮な驚きを覚えている。二〇二〇年春からの長きにわたった新型コロナウイルスのパンデミックは、法的なロックダウン（都市封鎖）には至らなかったわが国においても、「生存を妨げる」と見なされたものすべてを「無用」扱いする風潮を定着させていった。

家庭内でも食事を別の座席で食べ、外食や旅行を自粛する暮らしはすっかり当たり前となった。自分と家族が

感染しないことが第一で、そのためには他人の生業がいかに制限されようとかまわれないという発想は、当然ながら社会的な協同性を崩壊させる。宗教施設の行事ですら開催できない状態に追い込まれる例は少なくなかったし、対面への忌避が続けばやがて「専門家会議が「新しい生活様式(恋愛編)」として「出会いはアプリで」「キスは決死の覚悟で」「セックスは年に二人まで」などの提案をしてくるかも知れない」といったジョークすら聞かれた。

冒頭に引いた文面はその後、「人間はそうした付属物なしにでもやって行けるのだと×××が示している、ということはずなわち……社会がなくてもやって行けるのだ、ということでもある」と続く。バラバラの個人だけが存在し、経済活動(テレワーク)もコミュニケーション(SNS)も通信ネットワークを介してのみなされ、同じ国に生きる人々の全体を「社会」というまとまりと見なして、それを居心地のよい空間にしていこうとする発想を誰も持たない。<sup>(3)</sup>むしろ最新のITテクノロジーを駆使して、そんな余計なものなしでも暮らせるスマートシティをこの際築こう、それが「ニューノーマル」(新常态)だといった言論が、コロナ禍の初期にはメディアを席巻した。

しかしながら、三文字の伏字に入るのはコロナではない。正しくは「イク族」——かつて東アフリカの内陸国ウガンダの北部山岳地帯、スーダンやケニアに接する地域に暮らしていた少数民族の名称である。

## 二

引用の出典は、ロンドン出身の文化人類学者コリン・ターンブルが著した『プリンジ・ヌガグ 食うものをく